

特集「女性外科医の活躍」

「LEAN IN 一歩踏み出そう」「その時のBESTを」

「道は開ける（何とかなる）」外科に興味がある女子学生・研修医、
外科医として歩みだした女性医師に向けて



国立病院機構 千葉医療センター外科

榊原 舞

私は2000年に金沢大学を卒業し千葉大学医学部附属病院旧第一外科（現臓器制御外科学教室）に入局した。金沢大学の外科には女性研修医が一人在籍していただけだった。将来像が見えず、疲労した先輩医師を見て体力的にも不安を覚えた。でもやっぱり外科に興味がある。「やってダメなら納得」と進路を決めてから約20年になる。あの時外科を選んでよかったと心から思う。手術は楽しくやりがいがある。人のために働いている実感があるのも幸せなことだと思う。技術進歩で手技が洗練されていく面白さもある。

これまで「女医だからチャンスがなかった」記憶は全くない。分け隔てない扱いを受け、男性医師と同等に働けた（と自分では思っている（笑））。もちろん「外様の女医はいらん」医局は避けた。女医であるがために受けた心無い言葉に辛酸をなめたこともある。でも、むしろ女医であったことで看護師や患者、家族に喜ばれたことも多く、もしかしたら上司や周囲のあたりが男性医師に比べて柔らかかったかもしれない（きっと、そうだろう）。

状況が変わったのは2011年の出産後だ。多くの女性が悩む「仕事と家庭の両立問題」である。図1は日本の女性の医学生と医師が対象の調査だが、この問題への関心の高さが伺える。そしてこれは日本に限ったことではない。米国プリンストン大学卒業生を対象とした調査では、仕事と家庭の両立を困難と考える女性はおよそ60%で男性30%の倍であり、この割合は30年間（1976年～2006年）変化がない。また、両立困難と予想した男性の46%は“妻が子育てのために仕事を辞めるだろう”と答える一方、“子育てのために夫が退職また転職するだろう”と答えた女性は5%に過ぎない¹⁾。男性は仕事、家庭・育児は女という社会通念と個人意識は米国をもっても簡単には変わらないらしい。さて、自分の話に戻ろう。出産後の両立問題は私自身の考え方にもあった。最近では日本でも家事

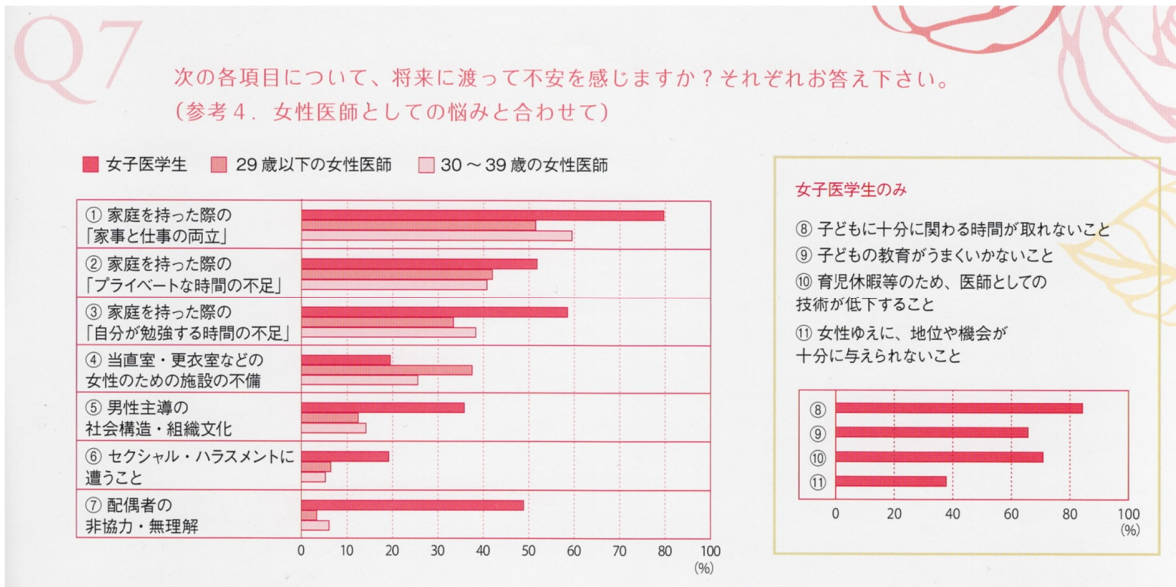
のアウトソーシングやベビーシッターが浸透しつつあるが、私は利用しなかった。“仕事復帰後も育児と家事に母親が主体的に関わるのが当然”という考えが抜けなかったのだ。典型的なステレオタイプだった私は、同じく外科医の夫に家事分担と育児参加（「参加」では困るが）を大いに期待するが、仕事のセーブは抵抗があり希望しなかった。思えば、相談することなく“仕事をセーブするのは自分”と決めて育児短時間勤務+超過勤務をしている。自分は子供の行事が重なると学会の演題登録をせず、一方の夫は学会参加のため子供行事を休むのだ（もちろん大いに苦言を呈した（笑））。とは言え、勤務体系をセーブしても仕事内容、家庭や子育てをセーブできるはずもなく、結果、図2の通り「時間がない！」のである。この慌ただしい毎日は「臨機応変に」「その時の最良を選択」し「ベストを尽くす」ことの繰り返しだ。もちろん外科医の継続を“無理かな”と思ったことはある。子供の体調が悪い時と担当患者の緊急対応ができなかった時だ。後者は同僚が助けてくれた。心から感謝である。仕事を辞めるのは簡単、でも辞めてからの復帰は非常に大変だろう。将来を考えたら、セーブしつつも仕事を継続することが技術職である外科では大事だ。そう思い小さな歩幅で歩んでいる。今後、子供が成長し手が離れることもあれば、新たに子供に時間を割く必要もでてくるはずだ。次はどんなライフステージが待っているのだろうか。

少し資格の話。第2子出産後に消化器外科専門医と内視鏡外科学会技術認定を取得したことはキャリア継続の上で良い原動力、自信になっている。もちろん簡単ではなかった。前者は3年越した。1年目は息子の病児保育利用が多すぎ心が折れた（千葉市病児保育パンフレットのモデルは我が家の息子（笑））。翌年は症例登録すら間に合わず、無事申請登録した年は子供を寝かしつけつつスマホの明かりで勉強した。おかげで合格したが、もうあんな風には勉強したくない。内視鏡外科学会の技術認定は手術ビデオ審査で合否が決まる。自分の手術が認められたことは大きな自信になった。子育て中のbehindを精神的に補う要素が大きかったと思う。これを機に開設した胆石外来を軌道に乗せることが今の課題だ。そして、後輩に技術認定取得の援助ができれば最高である。

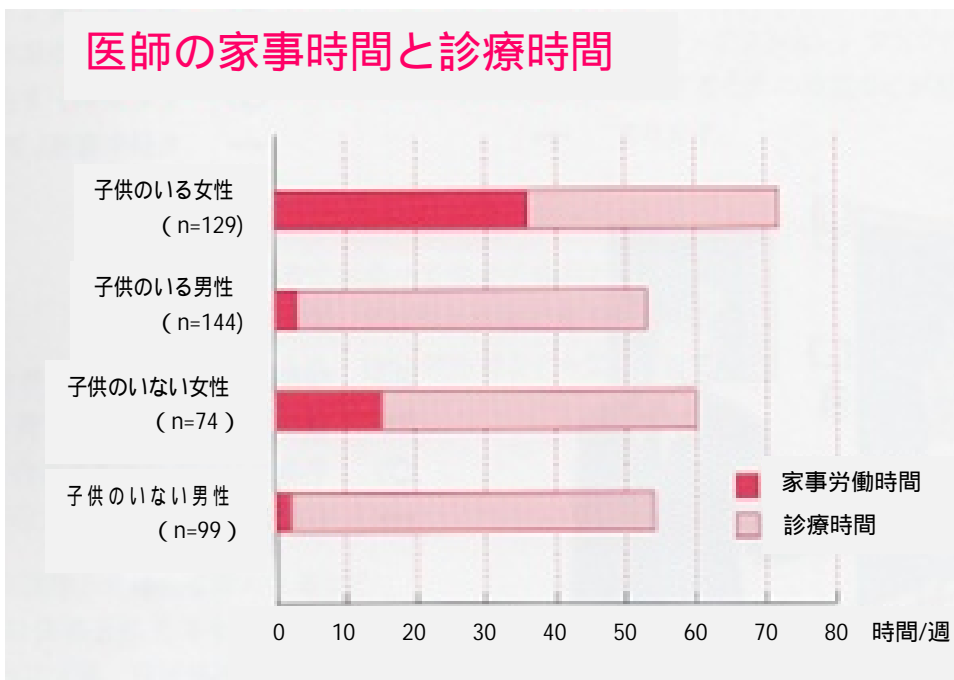
女性外科医は増えているがまだ少数派だ。また、生活背景やライフイベントのタイミングも異なるのでロールモデルが身近にいない。しかし、決まったルールがないからこそ自分で道を作れるのはメリットともいえる。仕事環境も常に変化していて、近年では「男女共同参画」に「働き方改革」「ダイバーシティー」が加わり‘受け入れ’にシフトしている様を感じる。外科に興味がある人には、ステレオタイプから“一步踏み出し”で“その時のBESTをつくせ”ば“道は開ける”、“何とかなる”と伝えたい。

最後に+ 。それは「謙虚」「感謝」「努力」、私自身が母に言われたことだ。時間がないのは自分だけではない、何とかなっているのは周囲の助けがあってこそ。それを忘れず、感謝し努力すること。これを心にとめてこれからも外科の道を歩こうと思う。

(図 1)



(図 2)



参考文献 1) Amy Sennett, “ Work and Family: Life After Princeton for the Class of 2006 ”

図 1、 2 日本医師会女性医師支援センター2013 発行「女性医師の多様な働き方を支援する」